



TITLE:

經濟の本質について

AUTHOR(S):

柴田, 敬

---

CITATION:

柴田, 敬. 經濟の本質について. 經濟論叢 1942, 55(6): 607-624

ISSUE DATE:

1942-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/131740>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 經 濟 論 叢

第五十五卷 第六號

昭和十七年十二月

## 論 叢

經濟の本質について……………

經濟學博士 柴田敬

史記・平準書にあらは貨幣思想……………

經濟學士 穗積文雄

第一次大英帝國の崩壊とアダム・スミス……………經濟學士 白杉庄一郎

## 研 究

中小工業金融市場の構成……………經濟學士 田 杉 競

都市及農村人口の自然的繁殖力に就て……………經濟學士 青盛和雄

佛領印度支那の關稅改正……………經濟學士 河野健二

## 說 苑

保險に對する認識の發展と保險學の性格的變化……………經濟學博士 小島昌太郎

南洋華僑觀……………經濟學士 鈴木總一郎

## 附 錄

彙 報

本誌第五十五卷總目錄

# 經濟論叢

第五十五卷 第六號 (通算四百零拾號)

昭和十七年十二月發行

## 論叢

### 經濟の本質について

柴田敬

#### 一序

經濟と正當に呼ばれ得るものいづれもを經濟として成り立たしめてゐるところのもの、それについて私はここでいささか考察を進めて見ようと思ふ。近來私は引き續いて三種の異なる經濟理論即ち資本主義的經濟理論、共同的全體主義的經濟理論および全體主義的經濟理論を展開した。それらの三種の經濟理論はそれぞれ別個のものであつて、未だ一つの統一體にまで高められてゐない。それらのものを一つの理論體系に高める爲には、それらの別々の經濟理論の前提となつてゐるところの夫々別個の體制の經濟を經濟として成り立たしめてゐるところのものそのものを、究めてかからねばならぬ。私が不案内な經濟本質論に手を染めることになつたのは主として此の故である。

## 二 經濟の本質

人は精神を持つてゐる。其の故にこそ人である。精神は物質と對立するものである。物質が人でないことは言ふまでもない。併し、精神はそれ自體において存立し得るものではない。それは常に其の反對物たる物質を俟つてはじめて存立し得るものとなる。人は精神と物質との生命的統一體である。

然るに生命體は不斷の物質的新陳代謝を行ふことなしには自己自身を維持し得ない。のみならず、人の精神的活動も物質を媒介として外的に表現されることなしには不可能である。従つて人は物質を不斷に攝取することなしには自己自身を維持し得ない。

併しながら人の環境は人に其の生命の維持發展の爲に必要な状態に於て必要な分量だけの物質を常に攝取せしめはしない。即ち人の生命の維持發展の爲の必要と其の必要に對する人の環境の適應との間には常に隔りがある。

斯くの如き人の生命の爲の必要と人の環境の適應との間の隔りは決して人の生活の物的基礎に關してのみ存するとは限らないのであるが、如何なる事に關してであるにせよ苟しくもそれが存する場合には、人は其の隔りの取除かれたる状態を欲するやうになる。欲望と呼ばれるものはこれである。欲望は其の前提をなす右の隔りが取去られることによつて消滅する。欲望がその前提たる右の隔りの除去によつて消滅することは、欲望の満足乃至充足と呼ばれる。而して、欲望の前提たる右の隔りを除去することによつて欲望を消滅せしめることに役立つところのものは、欲望の充足手段と呼ばれ、物質を其の充足手段とする欲望は物的欲望と呼ばれる。

物的欲望といふ時には往々にして人の肉體に關する欲望のみが考へられるのであるが、こゝに所謂物的欲望はそれではない。人の精神生活に關する欲望、例へば眞善美聖の探究追慕といふが如き欲望も、その充足の爲に物質を必要とする限り、物的欲望である。

人は其の生命の維持發展の爲には、攝取に適せる状態に齎らされたる物質たる物的欲望充足手段を繰返し攝取しなければならぬのであるが、攝取されたる物質はそれによつて攝取に適せる其の性質を失ふのである。即ち消費されるのである。従つて人は其の生命の維持發展の爲には、攝取に適せる状態に物質を繰返し齎らさねばならぬのであり、其の爲には結局自然的環境との關聯に於てさうせねばならぬのである。即ち繰返し生産せねばならぬのである。

人が其の生命の維持發展の爲に繰返し生産しなければならぬ物質は富と呼ばれる。富は一方から見れば生産されたるものである筈であるが、他方から見れば人の物的欲望の充足手段である筈である。

人は元來社會に於いてはじめて生きるのである。即ち人の生活はもと人間生活であり、社會生活である。従つて人の生活の爲の物的欲望も人の社會生活から全然離れたものではあり得ない。此の事は、人の物的欲望のうち生理的事情によつて規定されることの最も大であると考へられるところの食欲について之を考へても、容易に理解され得るところである。けだし、如何なる物質が何程食料として欲せられるかは、社會的歴史的事情の影響から離れ得ないのであるから。

従つて、人の欲望を満足せしめうるものの性質についての認定も亦社會的歴史的規定から離れ得ない。従つて一定の社會に於ては人の欲望を充足せしめうるものの性質について、比較的安定的なる認定が支配するやうにな

る。斯くの如く社會的歴史的に認定せられたところの「人の欲望を満足せしめる性質」は、それを認められたるもの使用價值と呼ばれる。

富とは、斯くの如き意味における使用價值を持てる生産物たる物質である。人は其の生命の維持發展の爲に此の意味に於ける富を繰返し消費しなければならぬのであり、従つて繰返し生産しなければならぬのである。

生産は生産要素の消費によつて行はれる。此の意味において生産はそれ自體消費である。併し此の意味の消費は生産的消費と呼ばれ、本來の消費から區別せられる。他方において、消費は何等かの仕方て人を生産する。即ち生産的消費は生産技能の進歩を、従つて新しき生産技能を生産し、本來の消費は人の身心を生産する。此の意味に於て消費はそれ自體生産である。併し此の意味の生産は消費的生産と呼ばれ、本來の生産から區別される。以下において消費乃至生産といふ場合、謂ふ所の消費乃至生産は右に規定されたる本來の意味におけるものである。

生産において人は自然によつて與へられる物質を人の欲望充足に適する生産物となすのであるが、消費においては人は生産物を欲望充足の爲に役立たしめて消滅せしめる。生産は人を物化し消費は物を人化する。生産と消費とは此の意味に於て既に概念的に反對物である。併し生産と消費とは單に概念的に反對物であるだけではない。生産と消費とは素材的に競争的な關係を相互間に持つてもある。即ち、一、生産物や土地やが消費される限り生産に要する生産財は調達され得ず、二、生産物が放縱に消費される限り、人の身心は虚弱となり勞働に不適となり、三、人の時間が勞働以外の用途に於て消費される限り生産に必要な勞働は供給されない。生産と消費との間には斯くの如く素材的に競争的な關係があるのであるが、それは、素材が生産と消費との何れの用途にも用ひ

得られる融通性を持つのみならず、融通性を持つ素材の供給量が所要に比して稀少である、といふことによるのである。

斯くの如く生産と消費とは相互に其の反對物であるが、而も生産と消費とは相互に他をまつてはじめて成り立つのである。即ち先づ概念的に、恰もそれによつて人が空中を航行することによつて航空機はじめて現實の航空機となる如く、生産は消費をまつてはじめて完成し、恰も航空機の生産によつてはじめて武器消費方法が航空機消費といふ形態を與へられて現實化する如く、消費は生産を俟つてはじめて完成するのであるが、生産と消費との間には更に、一、消費によつて人の身心が作り出されそれによつて生産に必要な労働が可能にされ、生産によつて消費に其の素材が提供される如く、素材的に補完的な關係があり、又、消費によつて新たな生産への欲望が起され、恰も航空機の生産によつてその消費への欲望が喚起される如く、目的的に補完的な關係がある<sup>1)</sup>。

斯くの如く生産と消費との間には素材的乃至目的なる補完關係があるのであるが、此の補完關係は生産と消費とが相互に對立するものであり競争關係を相互の間に含み得るものであるが故にあり得るのである。而も、生産と消費との間の競争關係は生産と消費との間に何等かの統一があることによつてはじめて可能なのであり、従つて生産と消費とが相互間に補完關係を持つことによつてはじめて可能なのである。斯くの如き生産と消費との矛盾的統一こそは、富の再生産を可能ならしむるものであり、經濟を根本的にそれとして成り立たしめてゐるところの經濟の本質である。

經濟は斯くして生産と消費との矛盾的統一であり、それとして人の生の物的基礎的面を構成するのであるが、其の經濟そのものに於ては生産そのものが物的基礎的面を構成するのである。何となれば、生産物は消費される

1) 生産それ自身を目的とする生産の場合には、生産の爲に人の時間及び物財を使ふことが同時にそれ等を消費の爲に使ふことでもあるから、生産と消費との間には當然素材的補完關係を生ずる。

ことによつて現實に人の生の物的基礎となるのであるが、それが現實に人の生の物的基礎となるなり方は主として生産物そのものの性質によるのであり、如何なる性質の生産物が生産されるかは消費によつて導かれはするが根本的には生産に關する人の能力によつて物的に規定されてゐるのであり、消費は生産に關する人の此の物的能力を規定しそれを通じても人の生の物的基礎を規定しはするが、消費の此の規定力は飽くまで生産に關する人の物的能力を變化せしめることを通じて發現すべきものであるから。

我々は右に於て經濟が生産と消費との矛盾的統一によつて成ると言つたのであるが、生産乃至消費はそれ自體又矛盾的統一によつて成るのである。

富の消費は富を各種の用途に配分することによつて行はれる。富が各種の用途に配分されるといふことは各種の用途が相異なるものであるから起り得ることであるが、それらが相互に異なる以上富の各種の用途は相互の間に、一方の用途が富を多く吸収する限り他方の用途の與り得る富の配分は減ぜられるといふ如き素材的競争的な關係を有すると共に、例へば米食の用途の爲に富が配分されることによつてパン食の用途に用ひられる富の所謂限界效用度が低下する場合における如く目的的に競争的な關係を有することすらある。斯くして富の各種の用途は相互に對立してゐるのであるが、而もそれらが對立してゐる以上は何等かの意味に於て統一されてゐる筈である。

この統一はそれらが結局人の全體的欲望の充足の爲のものであるといふ點にあるのであるが、單にそれにつ着ることなく、あたかも衣食住的用途の爲に費される富の量が相當に大であるといふ事によつて裝飾的用途の爲に費される富がはじめて意味を持つやうになる如く、又例へば航空機の調達の爲に配分される富が増加するにつれてガソリンの調達の爲に配分されるその所謂限界效用度が上昇する如く、富の各種の用途の間には目的的補充關



係があることがある。富の各種の用途の間の關係は往々にして單に競争的なものと考へられてゐるのであり、其の點に富の特徴があるかの如く考へられてゐるのであるが、例へば人の時間も之を一つの用途に用ふれば他の用途に用ひ得ざる如く、素材的競争關係にあるのは富の各種の用途に限つた事ではなく、又、富の各種の用途の間には競争的關係しかないのでもなく、補充關係があるのでもある。而も富の各種の用途の斯くの如き統一は、各種の用途が相互に對立するものであり競争關係を相互の間に含み得るものであることによつて、はじめて成立し得るものである。

富の生産は其の消費とは反對に各種の生産要素を配合することによつて行はれる。富の生産の爲に配合される各種の生産要素の間には、例へば富の生産の爲用ひられる機械の増加の結果勞働の爲に費され得る資力が減少し其の結果富の生産の爲に配合さるべき勞働の量が減少する場合に於ける如く、素材的に競争的な關係があることがあり、或は更に、例へば新しき生産技術の發見による機械の増加的使用の結果勞働の所謂限界生産力が減少する場合に於ける如く、目的的に競争的な關係があることがある。斯くして富の生産の爲に配合される各種の生産要素の間には對立關係があるのであるが、而もそれはそれらが一つの生産物の生産の爲に統一されてゐるからであり、相互に他を俟つてはじめて生産要素として成り立つものであるからである。即ち、生産には時間を要するのであり、其の期間中は次から次に勞働が投下されねばならぬのであるが、此のことは、之を反對から見れば、次から次に投下される勞働は其の以前に投下されたる勞働の結果たるところのもの即ち所謂資本財の用役を俟つこととなしには生産要素として作用し得ない、といふことを意味する。生産は又、何處かの空間において行はれねばならないのであるが、此の事は、勞働は所謂土地用役を俟つことなしには勞働として作用し得ない、といふこと

を意味する。反對に、資本財は勞働のたすけを藉り何等かの空間に於てでなければ、即ち勞働及び土地用役を俟つことなしには、生産要素として作用し得ないし、又、土地は勞働のたすけを藉ることなしには、從つて資本財のたすけを藉ることなしには、即ち勞働と資本財用役とを俟つことなしには、生産要素として作用し得ない。從つて富の生産の爲に配合される各種の所謂本來的生産要素は互に他を俟つてはじめて生産要素として成り立つのである。此の事は所謂本來的生産要素の結合物たる派生的生産要素を考慮に入れて之を見るとしても看取され得るところである。即ち各種の生産要素の間には、例へば機械の増加的使用によつて勞働の所謂限界生産力の上昇する場合に於ける如く目的的に補充的な關係のあることがあるのみならず、例へば競争的生產要素の出現によつて從來の生産要素の供給者が其の供給上の努力を増加する場合における如く素材的に補充的な關係のあることすらある。斯くして各種の生産要素は統一されてはじめて生産要素として作用し得るものとなるのであるが、而も斯くして統一され得る爲にはそれらは相互に對立の面を持たねばならないのであり、競争關係を相互の間に胎む可能性を持たねばならぬ。

生産物には多くの種類がある。富の生産は一方から見れば各種の生産要素を配合することによつて行はれるのであるが、他方から見れば生産要素を各種の生産物の生産の爲に配分することによつて行はれるのである。然るに、各種の生産物の間には、其の所要生産要素に關して、一生産物の生産の爲に用ひられる生産要素の量が増加することによつて他の生産物の生産の爲に用ひ得られる生産要素の量が減少するといふが如き素材的競争的な關係があるのみならず、例へば新しき生産技術に基づく機械を生産する爲に勞働が多く用ひられたる爲に其の機械を用ひる生産部門の勞働の所謂限界生産力が減少する場合におけるが如く目的的に競争的な關係があることが

あるのであるが、而も同時に、例へば機械の生産の爲に用ひられる生産要素の量が増加することによつて他の生産物の生産の爲に用ひらるべき生産要素機械が増加するといふが如き素材的補完的な關係があり、又、例へば機械の生産の爲に勞働が多く用ひられたる爲に其の機械を用ひる生産部門の勞働の所謂限界生産力が上昇するといふ場合におけるが如く目的的に補完的な關係がある。

生産と消費との眞の統一の爲には其の各々が自覺的に行はれてゐなければならぬのであるが、併し夫丈では足らぬのであつて、生産と消費との各々が兩者を統一に齎らす如き自覺に基いて行はれてゐなければならぬ。而して其の爲には、人生に意義ある欲望を持続的に最もよく充足することになる如く生産物や土地や人の時間や各種の生産的及び消費的用途の間に配分しなければならぬ。而して其の爲には、それらに對する消費的欲望が、その消費的欲望の充足手段を調達せんとする派生的欲望——生産を俟つて従つて生産的用途の爲にあてられる生産物(資本財)や土地や人の時間やによつて充足せられるべきと——同列に對比されるのでなければならぬ。此の意味において、視野を派生的欲望に限定し派生的欲望と其の充足との持續的調和を精神とする構成體に經濟の本質を見るところの見解は、生産と消費との統一をそれとして捉へ得ざるものと言はねばならぬ。

右に於て生産と消費との統一を考察するに際して我々は、一財の生産に關しては配合を云爲し、其他に關しては配分を云爲した。これは、前者の場合に於て問題を多より一への方向に見、後者の場合に於て問題を一より多への方向に見たことによるのである。我々が斯くの如き方向に問題を見たのは一應常識に従つたのに由るのに過ぎぬのであり、問題自體が本來斯くの如き見方をしか許さないといふことに由るのではない。問題自體は右とは全く反對の方向への見方を許すものでもあるのである。即ち、一財が色々異つた生産要素の配合の仕方によつて

も生産され得るといふことは、生産要素の間に例へば勞働の代りに機械を用ひることが出来るといふが如き所謂代用關係のあることを意味するのであるが、其の事は之を反面から見れば、生産要素の間に、例へば勞働（乃至勞働の調達）の爲に投下されるところのもの（が機械に轉換され得るといふが如き、融通性のあることを意味するものであるが故に、一財の生産の爲に各種の生産要素が配合されるといふ事は、之を反面から見れば、融通性を持てる一元的な生産要素がそれらの各種の具體的形態の生産要素としての用途に配分されるといふ事に他ならぬのである）反對に又、各種の用途に用ひられる限りに於ける生産物は何れも欲望を充足するものであり、それを通じて何れも全體的欲望充足に資するものであり従つて全體的欲望充足に資するといふ點よりすれば何れも相互に代用關係にあるものであるが故に、一生産物が各種の用途に配分されるといふことは、之を反面から見れば、全體的欲望充足のために夫々の「各別的用途の規定を受けたる限りに於ける生産物」が配合されるといふことに他ならぬのである。従つて、或は主張される如く配合と配分とを峻別し兩者の區別に技術と經濟との區別を求めることは、不可能といはねばならぬ。

經濟の本質を構成する生産と消費との矛盾的统一はその何處の過程をとつて見ても斯くの如く配分、配合乃至代用の問題を含んでゐるのである。従つて、配分、配合乃至代用又はその爲の考慮たる所謂經濟的計慮が往々にして經濟の本質と看做されるのは、經濟に含まれる個々の過程に共通的に存在するところのものを經濟其のものと誤認するとの批難は免れ得ぬとしても、一應理解出来ることである。併しそれにしても、經濟を構成する個々の過程に含まれるところの配分、配合乃至代用を本來支配すべきところの法則は、所謂配分法則乃至所謂代用法則とは必ずしも一致せぬ。此の點の認識こそは、從來の資本主義的な經濟基礎理論を共同的全體主義的なそ

れから區別せしめるところのものである。

生産には多くの種類の生産要素を必要とするのであるが、それらの多種の生産要素を必要量だけ支配するといふことは個々人には不可能である。従つて生産は、それに必要な各種の生産要素のそれぞれの量の提供を分擔する多數の人々の協力をまつてはじめて行はれる。然るに生産諸要素の間には幾に述べたる如く目的および素材的に競争關係および補完關係がある。従つて、多くの人々がその提供を分擔するところの各種の生産要素の間にもそれらの關係がある筈である。即ち各人の提供する各種の生産要素の間には、一方に於ては、例へば或る人が特殊の勞働を提供するが故に他の人の勞働がそれと衝突して其の所謂限界生産力が低下する場合に於るが如く目的的な競争關係があり、又、例へば或る人が特殊の勞働を提供することになりたる爲に他の人々が其の分擔せる勞働の提供に關して熱意を失ふ場合に於けるが如く素材的に競争的な關係があるのであるが、他方に於てはそれと同時に、例へば或る人が特殊の勞働を提供するが故に他の人々の勞働がより能率的となり其の所謂限界生産力が上昇する場合に於けるが如く目的的に補完的な關係があり、又、例へば或る人が特殊の勞働を提供することになりたる爲に他の人々が或は競争心を起し或は働き甲斐を感じて其の分擔せる勞働の提供に勵むやうになる場合に於けるが如く素材的に補完的な關係があるのである。生産はその爲に結合される多くの人々の提供する各種の生産要素の間に補完的な關係があることによつてはじめて可能となるのであるが、而もそれらの各種の生産要素の間の補完關係がよく實現され得る爲には、それらの各種の生産要素の提供者が心からその提供をなさねばならぬのであり、其の爲には、それら各種の生産要素の提供が其の提供者の自由に委ねられてゐなければならぬ。然るに、各種の生産要素の提供が其の提供者の自由に委ねられてゐるとするならば、それらの人々の提供

2) 此の點を拙著「新經濟論理」及び拙稿「新經濟論理」に於て例證したのであるが、私は近い機會にそれを再吟味するであらう。

する各種の生産要素の間には競争關係を生ずる危險を生ずるのである。即ち、多くの人々の提供する各種の生産要素は相互の間に競争關係の危險をはらむことによつてはじめて相互の間に補充關係を持ち得るのであり、それによつてはじめて生産要素として作用し得るのである。併し若し多くの人々の提供する各種の生産要素の間にたゞ競争關係だけが支配するならば生産はあり得ないのであり、それらの生産要素はそれとして機能し得ないのである。従つて、苟しくも多くの人々の提供する各種の生産要素がそれとして機能し得る爲には、それらの生産要素の提供が全體的に規制されてゐなければならぬのである。而も、此の規制の故に若し各種の生産要素の提供者から自由が全く取り去られるならば、生産要素の提供其の事が生氣を失ふことになるのである。生産は斯くして規制と自由との統一としてはじめて行はれるのである。

生産は斯くしてそれに必要な各種の生産要素の提供を分擔する多數の人々の協力をまつてはじめて行はれるのであり、此の意味において社會的協力其のことが勞働、土地用役及び物的資本用役と相併んで一つの本來的生産要素を構成すると考へられるやうになるのである。

生産が社會的に行はれる以上、消費も亦社會的に行はれる。然し社會的消費は、恰も社會的生産が個々人の生産要素提供分擔の社會的綜合によつて行はれる如く、社會的に規定されたる個々人の消費によつて行はれるのである。従つて社會的消費が行はれる爲には社會的生産物は個々人に分配されねばならぬ。然るに生産物はそれが或る人に多く分配される限り他の人には少ししか分配され得ないのである。即ち各人に分配される生産物の間には素材的競争關係があるのである。のみならず、恰も他の人々がその分配にあづかり得ないのであるからこそ特殊の裝飾品の分配にあづかることが意味を持つ如く、各人に分配される生産物の間には目的的競争關係があ

るのである。實に斯くの如き競争關係こそは富の分配に特有のものと往々にして考へられるものである。併し競争關係を持つのは決して富の分配に限つたものではない。人の愛といふが如きものも、其の分配は競争關係的な面を持つてゐるのである。のみならず、富の分配を支配してゐるものは決して競争關係だけではない。各人に分配される生産物の間には、恰も他の人々がその分配にあづかりそれを着用せることによつてはじめて帽子の分配にあづかる人にとつてそれが意味を持つ如く、目的的補完關係があるのであり、更に又、恰も電車の便にあづかる人が多いが故に電車が經營せられそれによつてはじめて我々が電車の便にあづかり得るやうになる如く、素材的補完關係もあるのである。

分配はそれを受ける個々人の側より之を見れば分受である。曩に述べたる分擔に對應するものは他ならぬ此の分受である。富は人の欲するところのものである。従つて人は可及的多く分受せんとする。然るに分受が可能なる爲には生産物が出來てゐなければならぬのであり、生産物が出來る爲にはその生産の爲に必要な生産要素の提供の分擔がなされてゐなければならぬ。従つて分受は形態的にも分量的にも分擔によつて規定される。分擔の増加は或は分受の増加を來し或は反對に分受の減少を來す。然るに分擔はそれ自體分受を前提とするものであり分受によつて規定されるものである。分擔は擔當の分受であり、又、土地を分受せるものにしてはじめてその用役の提供を分擔することが出來、物的資本を分受せるものにしてはじめてその用役の提供を分擔することが出來るといふが如く、根底的には生産要素の分擔はその分受によつて規定されるものである。そのみならず、人は元來自ら生産することなく父祖の生産物を分受することによつてはじめて分擔し得るものとなるのであり、分受せる生産物を投下することによつて物的資本用役の提供を分擔し、分受せる生産物を消費して身心をつくる

ことによつて勞働の提供を分擔し得るに到るのであり、又例へば勞賃の支拂を受けて勞働する如く一定の分受をなすことを條件乃至目的として分擔をなすのである。従つて、分受の増加は一方に於ては分擔への熱意をかき立てると共に人の身心を勞働に適せしめ乃至は物的資本化さるべき財源を豊富にし、それによつて分擔を増加せしめる。併し他方に於ては例へば勞働者の分受の増加は、彼等を勤勉へ驅り立てる生活苦の答を彼等から取り去ると共に彼等の身心を墮弱にして勞働に不適ならしめ、それによつて分擔の減少を來す。のみならず、元來生産要素の提供の分擔は、一方に於ては生産要素たるべき素材の消費的用途に於ける利用を犠牲にすることを必要ならしむる性質を有するのであるが、他面に於てはそれと同時に例へば指揮的勞働乃至所謂精神的勞働の提供の場合に顯著に之を見るが如くそれ自體人によつて希望される性質を持つてゐる。前者の關する限り人は生産要素の提供の分擔を可及的回避して他に轉嫁せんとするのであるが、後者の關する限り人は他を排してまでも進んでそれを行はんとするのである。而して之等の二面の性質は程度の差こそあれ生産要素の提供の分擔に常に含まれてゐるのであり、それらの性質がそれぞれほど強く意識されるかは、提供さるべき生産要素の種類によると共に生産要素の提供の分擔の行はれる環境と人の自覺とによるのである。而して右に指摘されたる二つの性質の第二のものが強く作用すればするほど、生産要素の提供の分擔は分受による刺激からより多く獨立的に進み得るものとなるのである。併しそれにしても生産要素の提供の分擔は生産物の分受から完全に獨立し得るものではない。何となれば生産物の分受は生産要素の提供の分擔に關する環境の重要な一つに他ならぬのであるから。

分受は社會の立場より見れば分配であり、分擔は社會の立場から見れば分課である。經濟が成り立つ爲には生産力の維持發展を可能ならしむる如き生産要素提供の分擔がなされねばならぬのであり、従つて斯くの如き分擔



を可能ならしむる如き生産物分受がなされねばならぬのであるが、其の爲には斯くの如き分擔分受が分課分配として社會的統一に行はれてゐなければならぬのであり、従つて各人の分擔分受が社會的に規制されてゐなければならぬ。此の社會的規制は正に社會的規制であるが故に、社會的自覺的であらねばならぬ。併し此の社會的自覺による規制は、其の規制者が他の社會構成員をたゞ一方的に支配し後者が前者の意志のまにまに單に機械的に動かされるといふ仕方によつては決して行はれ得ない。何となれば個々人は決して道具化し盡され得るものではなく、常に個々人として其の獨自性を保持してゐるのであり、正に其の故に社會を單なる有機體以上のものたらしめてゐるのであるから。經濟は斯くの如き自由と規制との矛盾的統一より成る社會的生產と社會的消費との矛盾の統一としてはじめて存立し得るものとなるのである。而してさうである以上、經濟は何等かの社會的組織を持ち社會的に運營されるものでなければならぬのであり、社會的なる構成の仕方を其の本質的内容として持つものでなければならぬのである。

### 三 經濟の本質と現象

以上に於て私は經濟の本質を自由と規制との矛盾的統一より成る社會的生產と社會的消費との矛盾の統一としてとらへた。經濟は正に斯くの如きものであるが故に、或は規制に傾いて全體的一的なるものとなり、或は自由に傾いて個物的多的なるものとなり、或は消費に傾いて生産壓迫的消費的なるものとなり、或は生産に傾いて消費無視的生産的なるものとなるのである。

經濟の本質に内在する右の偏向の可能性を現實化する事情には色々のものがあるのであるがそのうち重要な

一つは生産方法に關する能力即ち生産技術である。生産技術が此の點に於て重要性を持つに至るのは、曩に述べたる如く、生産が經濟的基礎的面を構成するといふことによるのである。<sup>3)</sup>

物的生産力が主として人の肉體的勞働に依存するが如き生産技術の下に於て人が其の最低の生存を維持するに必要なる以上のものを生産し得るに至つてゐる限り、人の物質的生産力の發揮は主として勞働者に對する勞働の強制にまつ。従つて斯くの如き事情の下に於ては經濟は全體的一的なものとなる傾向を持つ。

之に反して、例へば資本財を基礎として各種勞働を綜合することに人の物的生産力が主として依存するが如き生産技術の下においては、生産力の發揮は主として斯くの如きことをなし得る人の能力の動員にまつ。然るに、資本財を基礎として各種勞働を綜合すること其の事は、一方では精神的勞働に屬することであり、他方では夫々の生産物の生産に關して、從つて夫々の生産物の生産に携はれる夫々の經濟單位の内部に於て行はれるものである。從つて斯くの如き精神的勞働の動員は強制によることは出来ないと共に、直接には社會的全體的規制を必要としないのである。從つて斯くの如き事情の下に於ては經濟は個物的多的なものとなる傾向を持つ。個物的多的なる經濟に於ては個人が社會的規制から離れて自己を抽象的に主張するのであるが、斯くては社會は成り立たないのであり、從つて經濟はなり立たぬ。從つて社會から抽象されたる個人は何等かの仕方で社會性を取りかへさねばならぬ。此の社會性回復の形式が交換である。即ち此の場合には、各種の經濟單位の所要とする生産要素は購買を通じて蒐集せられ、生産は販賣の爲に行はれ、生産物の分配は購買力の分配と其の購買力を以てする購買との二段の過程を経て行はれ、購買力の分配は生産要素の賣買乃至生産費以上の價格を以てする生産物賣買といふ形態に於て生産要素乃至生産物販賣者に與へられる。從つて此の場合には、購買力の分配の問題が社會的生產

3) 此の事を認むることは所謂唯物史觀を認むることを意味し得ない。けだし所謂唯物史觀は、夫々の生産方法に照應せる夫々の經濟體制の實現が國民團體意志的に行はれることを認めず、階級闘争的に且國家の權力機構の暴力的否定を通じてしか行はれぬものとするのであるから。此の點については他の機會に譲る。

物の分配の問題から分化して本來の分配問題であるかの如く現はれると共に、生産も消費も、従つて分謀分擔も分配分受も、すべて交換によつて素材を與へられると共に目的と完成とを與へられ、交換によつて規定されるものとなる。併し、交換はそれ自體としては生産でもなく消費でもない。生産要素や生産物が交換過程にある限り生産も行はれねば消費も行はれない。交換は斯くして生産消費の反對物である。而も此の反對物たる交換によつて生産消費がはじめて可能とされるのである。他方、生産や消費が行はれてゐる限り交換は行はれぬのであるが而も生産は生産要素の交換に目的を、生産物の交換に素材を與へ、消費は生産物の交換に目的を、生産要素たる勞働の交換に素材を與へることによつて、それぞれ交換を生かすのである。斯くして此の場合には經濟は生産消費と交換との矛盾的統一としてあらはれる。

斯くの如く經濟は或は其の全體的一的面に傾いて全體主義的なものとなり或は其の個物的多的面に傾いて個人主義的なものとなるのであるが、經濟の斯くの如き偏向は其の生産壓迫的消費的なものへの偏向乃至消費無視的生産的なものへのそれと密接なる關聯を有する。即ち、全體主義經濟は、其の下に於て經濟運營上の決定力を掌握せる權力者が現實の生産活動から遊離せる爲に現實の勞働者の身心の向上に資せざる如き消費——奢侈乃至戰亂的消耗といふが如き——に陥る危險性を持つが故に、生産壓迫的消費的なものに偏する傾向を持ち個人主義經濟は、其の下に於て經濟運營上の決定力を掌握せる各經濟單位經營者が現實の消費から遊離せる爲に生産物價格の生産費超過分たる利潤の擴大其の爲の生産擴大に陥る危險性を持つが故に、消費無視的生産的なものに偏する傾向を持つ。而も以上何れの場合に於ても、全體的一的なものと個物的多的なものとが抽象的に對立せるが故に、其處に於ける富の分配乃至生産諸要素提供の分擔其他に關しては素材的乃至目的的に

競争的なる面が支配的となり、あたかもそれが經濟に特徴的なるものであるかの如くあらはれる。

之に反して、人の物的生産力が主として精神労働の全體的綜合に依存するが如き生産技術——それは極めて高度の技術構成を前提とする——の下に於ては、人の物的生産力の發揮は労働者の自發心に訴へるといふことゝ労働を全體的計劃的に規制するといふこととの相互に矛盾する二つの要請の統一にかゝつてゐる。従つて斯くの如き事情の下に於て經濟ははじめて「個物的多と全體的一との矛盾的統一」的なるものとしての其の本質のまゝの共同的全體主義的なるものとなり、従つて、社會的消費と社會的生産との矛盾的統一としての其の本質のまゝの現象をとることになる。而して此の場合においてはじめて、富の分配乃至生産諸要素提供の分擔其他に關する競争的關係と補完的關係との統一があらはれ、競争的關係が經濟に特徴的なるものであるかのやうな觀が取り去られる。

現實の經濟は斯くの如く或は全體主義的に構成せられたるものとなり或は個人主義的に構成せられたるものとなり或は共同的全體主義的に構成せられたるものとなる。斯くの如き構成は現實の經濟の本質的内容をなすのである。従つて、全體主義的構成にしろ、個人主義的構成乃至共同的全體主義的構成にしろ、それを經濟への構成と對立的に考へることは不可能といはねばならぬ。